

# 家庭教育・しつけの現状と子どもの福祉

元 木 久 男

## The Present State of the Discipline of a Child in the Family and the Well Being of Children

Hisao MOTOKI

### 1. はじめに

今、子どもが危険な状態にあるとの危機意識が高まっている。中学3年生が起こした猟奇殺人ともいふべき、まだ記憶に生々しい“酒鬼薔薇事件”や栃木県で起こった中学1年生の女性教師ナイフ刺殺事件などに象徴される子どもの引き起こす凶悪犯罪の報道が目を惹くようになっている。先頃の青少年問題審議会の答申でも、現在少年非行が戦後第4のピークに向かいつつあるとの指摘がおこなわれた。また、子どもが教師の言うことを聞かず授業の成り立たない学級崩壊問題が大きな話題となっている。この学級崩壊現象は保育園や幼稚園にまで広まり始めているともいわれる。ちょっとしたことで“ムカ”ついてすぐに“キレ”る子どもたち。一体今の子どもたちはどうなっているのだとの嘆きが聞こえてくるようである。そして、その背後で、今の親や家族はなにをしているのだ、なっていないとの不満が充満するようになっている。本稿では、現在、なにゆえこうした嘆きや不満が充満するようになっているかの探究を通して、今日の家庭教育・しつけの性格を吟味し、現在の家庭教育・しつけが子どもの福祉、ウェル・ビーングの実現の点から、どのように評価されるものであるのかを明らかにしていく。

### 2. 家庭のしつけの衰退のイメージと家庭教育・しつけの低下への嘆き

まず、現在の家庭の教育やしつけが望ましい状態にあるかについての評価をとりあえず保留したうえで、その現状に目を向けてみると、今の家庭教育・しつけはどれも評判がよくない。さきにふれた子どもの凶悪犯罪の報道でも親や家庭でのしつけのあり方が問われていたし、学級崩壊についても、それが（家庭での）基本的なしつけが不十分であることが原因だとの見解が示される。中央教育審議会が1998年におこなった答申でも、「特に、過保護や過干渉、育児不安の広がりやしつけへの自信の喪失など、今日の家庭における教育の問題は座視できない状況になっている」ことが指摘されていた。家庭の教育力が低下しているとの一般に流布している見解に疑問を投げかける広田

照幸は、そうした見解を、〈家庭のしつけの衰退〉イメージと表現している。そして、「〈家庭のしつけが衰退している〉というイメージは、政府の審議会でもマスコミでも世論でも、〈常識〉となっている」という<sup>(1)</sup>。家庭教育・しつけは、現在、どうやらこうした“衰退”ないし“低下”しているとのイメージで受けとめられ、“近ごろの親は、家庭のしつけはなってない”と嘆かれるようになってきているみたいである。勿論、その背景には、子どもの心身の発達、行動や生活に対して危機感が抱かれるようになってきているといった事情が横たわっている。上述の中央教育審議会の答申にもそうした危機感が示されていたし、なによりもこの答申が出されるきっかけが例の酒鬼薔薇事件であったのである。

以上、子どもに対して危機感が抱かれ、それを背景に家庭教育・しつけの低下が嘆かれるようになってきている点を指摘してきた。けれども、こうした危機感や嘆き・不満が抱かれたり、表明されているからといって、現実には子どもが危険な状態あり、そしてそれが家庭教育・しつけの低下に起因したものと単純に断定することはできない。ただ、たしかにいえるのは、子どもに対して危機感が抱かれ、家庭教育・しつけがなくなってないかと嘆かれているという事実である。そこで、本稿では、この“実際に子どもに対して危機感が抱かれ、家庭教育・しつけが嘆かれているのだ”ということを出発点に論を進めていくことにする。すなわち、どうして子どもに対して危機感が抱かれ、家庭教育・しつけが低下したと嘆かれるのであろうか、その解答を探り出していこうというわけである。はたして、そうした危機感や嘆きが表明されるほど、現在子どもの状態は悪化し、そして家庭は荒廃し親はだめになってしまっているのであろうか。

ところが、その低下への嘆きと逆に、現在の家庭教育やしつけを肯定的に捉える見解も見受けられる。さきにみた広田の見解がそのひとつであるし、また、湯沢雍彦も、昭和10年代と戦後におけるとくに母親の子どものしつけについてのデータを比較して、「母親の養育活動が退化したとはとてもいえない」と結論している。さらに、子どもの未来を展望するにあたって、「明治維新以来120年の歴史をふり返ってみると、日本社会が子どものことを賞めそやしたのは『小国民』と称えた昭和10年代だけであった。戦争のための戦力・労働力として貴重だったからである。それ以外のときは、育児がなくなってないかと親を叱り、教育が足りないと教師を叱り、なってないと子どもを嘆く主張ばかりが横溢していた……これは、何故なのだろうか……こういった無益な嘆きの繰り返しが続けられているように思えてならない」と述べている<sup>(2)</sup>が、子どもやその子どもの教育・しつけの評価にあたって、否定的方向へのバイアスの作用が含意されていて興味深い。いずれにせよ、以上のような家庭教育・しつけの低下についての疑念も存在するわけであって、それだけ、今日家庭教育・しつけがこれほど嘆かれている理由を探る意義があると思われる。以下、その作業を進めていく。

まずなによりも考えなくてはならないのは、現在の家庭教育・しつけが実際に大幅に低下してきている現実を反映してこうした嘆きや不満が表明されているのではないかということである。実際、核家族化の問題や、濃密な母子関係の問題、影の薄い父親の問題、さらには親が未成熟であることから生じる問題など、親や家族による子どもの教育やしつけに関する問題点の指摘は数多くみられる。その多くは現代の家族の変動に伴う子どもの養育・教育機能の弱体化の結果にその主な原因が求められている。たとえば、庄司洋子は、家族は近代化したことによって、子どもを養育したり、教育・しつけるうえでいくつかの重大なマイナス要因を内包するようになったと指摘する<sup>(3)</sup>。すな

わち、まず生産機能を失った近代家族は、労働者家族として経済基盤が不安定であり、かつ消費集団として結合基盤が不安定でもあるという二重の不安定性ゆえに貧困と解体の危機を招き入れやすいという。家庭の貧困と子どもの教育とのあいだに明確な傾向がみられるというわけではないが、青木紀によれば、「親の職業・年収・世帯類型別に見た一般的な不利が……その子どもたちの学校における不利へと反映」するようになっていたり、社会階層を超えて普遍的に発生するようになったとの指摘が目立つ登校拒否・不登校現象も「社会的に不利な貧困層の子どもたちの不登校が他方で形成」されてもおり、さらに非行についても少年院への入所で見れば「現実には非行と貧困の結びつきを示唆」<sup>(4)</sup>しているという。もし貧困が家庭教育・しつけを低下させる方向に作用するのであるならば、貧困の危機を招き入れやすい家族の変化はそれだけ家庭教育・しつけの低下に結びつきやすいということができよう。また近代家族は愛情を基盤とした消費集団であるがゆえに人間関係が不安定であり、家族解体に向かうモメントをもつがゆえに容易に養育・教育困難に陥りやすいという弱点は、最今頻繁に目にするようになった家庭崩壊という言葉に象徴的に示される家族関係の病理が子どもに反教育的に作用する問題として現出しているとみることができよう。こうした家族の病理的な関係の発生とはいかないまでも、「家庭の外で過ごす人と過ごす時間が増加し、家族はいわば空洞化する傾向」を強め、この家族の空洞化は「ヒトについて、ますます貧しくなっている……人間関係を学ぶ場としては、誠に貧しい環境」となってしまった<sup>(5)</sup>ということもできよう。

つぎに、庄司は、近代家族が消費共同体であるがゆえに子どもの養育自体が家族に貧困をもたらしやすいこと、および「家業の後継者や家族労働者の育成という意味をもたない子どもの養育について」明確な方針をもつことが困難なことも子どもの養育や教育を困難にするという。前者は、労働者家族にとって子どもの養育は大きな経済的負担となっており、そのことが子どもの養育困難につながるということであるが、とくに消費社会の進行する現代社会では、家族のなかの子どもの存在が家計消費を圧迫し、子育てが「消費」と位置づけられる<sup>(6)</sup>に至って、子どもの養育や教育が家族にとって莫大な金のかかる営みとなっている点を見逃すことができないであろう。また、かつて家族が生産の単位であった時代には、「子どもの教育は、もっぱら生産労働の技術を体得させることが主要な内容であった。こうした生活技術の体得は、子どもが小さいうちから実際の労働に参加させることにより、日常生活の中で自得させていくのが通常の方法」であった<sup>(7)</sup>。こうした教育やしつけは、佐藤カツコが指摘するように、明確な方針のもとに教え込むようなしつけというより自然主義的なしつけ<sup>(8)</sup>であったのかもしれないが、少なくとも親は実際の労働のなかで自分たちが額に汗して働く後ろ姿を子どもに学ぶべきモデルとして提示することが可能だったはずである。ところが、家族が生産機能を失い雇用労働が一般化すると、親や家族は子どもにその将来を予想して労働や生き方のモデルを示すことが困難となる。たしかに、牧野カツコが指摘するように、家族が生産の機能を失うことによって「子どもは親の職業をほとんど継がない。サラリーマンの親には、子どもに譲り渡す田畑ものれん芸もない。自分の仕事のやり方や仕事のうえで身につけた技術や知識を子どもに教えたり」しなくなった<sup>(9)</sup>、というよりできなくなってしまったのであろう。さらに、「親とともに働く体験を失うことによって、子どもは人間の発達に大切な、情緒や意志の力を弱めている」といった問題も生起するようになった<sup>(10)</sup>ということもできよう。

そして最後に、庄司によれば、小家族化という家族の変化が子どもの養育上のマイナス要因となる。

近代家族は小規模な核家族の形態をとるところに大きな特徴があるとされるが、この家族規模の小ささが子どもを養育、しつけるうえで様々な弱点をもつとの指摘は数多い。たとえば、小規模な核家族では子どもの社会化過程における役割モデルが貧弱であるという問題点や、小規模であるがゆえの親子関係、とくに母子関係の濃密化に起因する問題、さらに兄弟関係の縮小に伴う貧弱な同胞関係の経験の問題性などが指摘<sup>(11)</sup>されている。たしかに、「人間は、いろいろな人と、いろいろな質のちがう人間関係を体験し、いろいろな質の人間関係を『見る』ことによって、人間らしく成長していく」ものであるはずなのだろうが、「現代の家族のなかでは、子どもはほとんど母親とだけしか人間関係の体験がない」<sup>(12)</sup>ところに、現代の家庭教育・しつけの主要な問題が所在するということもできよう。まさに、松原治郎がいうように、「どうしてこのちっぽけな核家族という集団が、主として人間成長の重要な時期を担当しなければならないのだろうか」<sup>(13)</sup>という疑念も湧いてこようというものである。

以上、庄司洋子の指摘する家族の近代化に伴う子どもの養育・教育上のマイナス要因を中心に、家族の変動に伴って子どもの教育・しつけ機能が弱体化してきているのではないかという点についてみてきた。たしかに、近代家族が子どもを養育したり、教育・しつけるうえで、以上のような弱点をもっていることは否めないであろう。だが、そうだからといって、近代化した家族が近代化する以前の家族に比べて子どもの養育や教育機能の遂行において劣るものであると即断することはできない。留意すべきは、それらの家庭教育・しつけの問題点の指摘は、じつは、家庭教育・しつけに、今、どのような問題が内包されているのかを指摘してなのであって、厳密な意味で過去に比べて現在の状況が悪化しているという指摘ではないということである。たとえば、近代家族が経済的に不安定であるために子どもの養育や教育機能の遂行にあたって困難に直面しやすいといっても、それでは過去において、親が朝から晩まで田畑に出て日々の生活の維持に手いっぱい、とても子どもの世話にかまけている暇はなかったような事態がしばしばみられたとするならば、それでも、かつての家庭教育・しつけは現在のそれよりも優っていたといえるであろうか。また、かつて親は自分自身の、とくに働く姿を学ぶべき強力なモデルとして子どもに示すことができていたということも、よく吟味してみれば、それは子どものしつけの一環というより、むしろ子どもの労働力化の結果とみることもできる。つまり、子どもが労働を通じて厳しくしつけられていたといっても、それは子どもが早い時期から農業などの家業を手伝わされていたこと、そして、その労働管理の観点から結果的に厳しくしつけられていたということではないだろうか。広田照幸が述べるように、「ていよく親にこき使われるだけという親子関係もしばしばあった」<sup>(14)</sup>のかもしれない。もしそうだとするならば、後に述べるように、かつて親によって子どもが厳しくしつけられていたという事実は、今日自明視されている子どもの教育・しつけとは違った意味をもつものとして捉え直されなければならないことになろう。かつての庶民家族のしつけを考察した徳岡秀雄が「生産活動を最優先せざるをえない生活構造ゆえに……ある程度役立つようになる7歳頃からは、子どもを積極的に労働に参加させて厳しくしつけた」<sup>(15)</sup>と述べているが、それは現代的な意味のしつけであったというより、親が子どもに自分の仕事を手伝わせる方便としておこなわれていたものだったのではないかということもできるのである。さらに、核家族化や家族規模の縮小によって子どもの養育・教育機能が低下したのではないかという点に関して、そうした核家族形態や小規模家族での子育てやしつけに様々な問題の伴われることが事実だとしても、そうだからといって、かつて子どもは大

家族のなかで確り育てられ、しつけられていたのだということにはならないであろう。そもそも、かつて子どもが包容力に富んだ“大家族”のなかで生活したり育て上げられていたということ自体、甚だ疑わしいものになっているのである。もし仮に“おじいちゃんやおばあちゃん”に見守られての子育てに利点があるとしても、その恩恵にあずかれたのは“長子の家族”だけであつたはずである。

### 3. 伝統的な地域共同体の崩壊と子どもの教育・しつけの危機

以上のように、現代の家族は、たしかに子どもを育てたり、しつけたりするうえで様々な問題や弱点を抱えているわけではあるが、そうだからといって、現代の家族が“むかしの家族”に比べて子どもの養育・教育能力が劣るようになってしまったということにはならない。そうすると、現在の家庭教育・しつけの低下の嘆きにはもっと違った理由があるはずである。さらに、その理由を家族内部の条件に求めることができないとするならば、子どものしつけや教育に関与する家族外部の条件にも目を向けなければならぬであろう。そこで、家庭教育・しつけの低下がなぜ嘆かれるのかを探る作業を進めるにあたって、つぎに注目すべきは、かつての地域共同体にみられた“子やらい”のような子育て慣行がすっかり廃れてしまったからではないかという点である。すなわち、家庭教育・しつけに不満が表明されるといっても、そもそも、家族はこれまで単独で子どもの養育や教育を十全におこなってきたわけではなく、常に親族や地域共同体等の相互扶助的な協力関係を必要としてきたのであって（その端的な例が子やらいであろう）、家族の私化もしくは私事化に伴って、そうした協力関係が弱まり、家族が単独で子どもの養育や教育にあたらなくてはならなくなった結果、家族の弱体が露呈するようになったにすぎないといった見解も成り立つ。

たとえば育児ネットワークの再編成の必要性を指摘する落合恵美子のいうように、『『家族』という集団が独力で子どもを育てたことなど、いつの時代にもなかった』のであり、「子どもはいつも、近所のおばさんや親戚のおじさん、遊び仲間や学校など、さまざまな種類のネットワークの中で成長」してきたのであって、したがって現代の育児も「重層化した種々の育児ネットワークに支えられ、けっして母親ひとりあるいは家族のみによって担われているのではない<sup>(16)</sup>」とみなすこともできよう。また、網野武博は、近世までは核家族を超えた拡がりのなかで拡大的、多面的な育児である複相的育児がおこなわれており、そしてこの複相的育児は子どもを養育するうえでさまざまな長所をもっていたのだが、近世以降、両親とくに母親による限定的で一面的におこなわれる育児の単相化がすすみ、育児の多様性と弾力性を低下させる等深刻な問題を発生させるようになったと指摘<sup>(17)</sup>する。さらに、原ひろ子も、子どもを育てるのは親しかできないかという問題の探究のなかで民俗学の知見に基づいて、近代以前の日本においては、「子は親の力だけで育つとは考えられていなかった……親たちは、自己の能力の限界を知っており、その限界の外にある部分を、自己の信頼する世間に委ねていた」と、子どもの養育や教育が親や家族を超えた「世間」という拡がりのなかでおこなわれていたとし、それが近代に入り、「ムラの崩壊と都市化が進行する中で、都市の中産階級が増大していくにつれ、『子を育てる』ことに関して、親の側からの世間への信頼が減じ、それに応じて、育児における親の責任や分担が増大してきた……そして、人びとが『親がなければ、子は育たぬ』と考える度合いも強まってきた<sup>(18)</sup>」という。原の立論は、現代の子育ての行き詰

まりが母性の過度の強調に起因するとみなし、明治以降とくに強まった、そうした「誰も母親の身代わりはできない」という観念をいかに止揚するかをめざしたものではあるが、かつて子育てや子どもの教育は地域全体で取り組んでいたが、現在ではそれが母親一人の肩に重く押しかかるようになってしまった、そのために様々な子育て問題が発生するようになったのだという主張を含んだものであり、さらに「子育てを一家庭の問題として狭くとらえるのではなく、社会政策全般の中にどう位置づけるのかという政策上の問題」なのだ<sup>(19)</sup> という点にも、地域や親族の協力を得られず、単独で子どもの養育や教育に奮闘する労働者家族の非力が指摘されているといえよう。

以上に見てきたように、家庭教育が低下したからというよりも、つまり家族だけが問題なのではなく、主に親族や地域社会等の家族を取り巻く子どもの養育・教育環境の悪化に問題の根本があるのだということも成り立つ。子どもの養育・しつけが私事化し、また伝統的な地域共同体も変貌をとげ、それまで親や家族が親族や地域との連携でおこなってきた子どもの教育・しつけから親族や地域が手を引いてしまった、その結果子どもの教育・しつけ責任が家族に重く押しかかるようになったというわけである。もしそうであるならば、現在の家庭教育・しつけの低下として嘆かれる状況は、本来は家庭教育の枠を超えた、地域社会全体にとっての子どもの教育・しつけ上の問題だとみなさなければならぬはずである。ところが、現実には子どもの教育・しつけ上の問題は家族内部の問題として認識され、学校を除いては、専ら家族だけにその不満が向けられるようになっていく。こうして、私事化し、親族や地域の協力を失った家族は子どもの養育や教育において弱体であることを露わにし、その教育・しつけ能力の低下というよりも非力が嘆かれるようになる。たしかに、ここのところ、地域子育て支援の推進や、地域の教育力の回復への提言、さらには新たな子育てネットワークの編成の奨励といった一連の動きが目立つようになってはいる。けれども、“しつけがなっていない”と嘆かれるのは、やはり“親”であり、“家族”なのであり、それも“今”の親、家族なのである。なぜ、家族だけが、家庭教育・しつけの低下だけが嘆かれるのか。子どもの養育や教育から地域共同体や親族が手を引いてしまった家族の非力に不満が集中するようになったためなのであろうか。はたして、かつて「出産や育児を共同体全体で受けとめ、生児の成長を社会的に承認しつつ一人前の村人として育てあげようとした」頃に比べて「伝統的な家やムラ社会を離れ、独立した家庭生活を営むようになると……出産や育児に対してはほとんど頼るべき人もいないなかで若い妻が一人で受けとめなければならぬ」なり、「育児ノイローゼから母子心中する事件」<sup>(20)</sup> が発生するほど親や家族はその非力が剥き出しにされ、その評判をすっかり下げてしまったということなのであろうか。たしかに、網野が指摘するように、事実子どもの養育やしつけに対する責任はかつてないほど親や家族に重たく押しかかるようになってしまっている<sup>(21)</sup> のであろう。また、かつて地域共同体や親族は今以上に子どもの養育や教育に関わっていたことも事実であろう。だが、そうだからといって、単純にこの二つの事実が結びつくものだとすることはできない。すなわち、子どもの教育やしつけへの地域共同体などの関与の縮小だけで現在の親の養育・教育責任の増大を説明しきれぬものでもなければ、ましては親や家族の教育・しつけ力の低下が嘆かれている事実を説明できるものではない。なによりも、かつて地域共同体が子どもの教育やしつけに深く関与していたからといって、子どもが、とくに現代的な意味で十全にしつけられていたとはかぎらない。「子供は家のしつけだけでは十分でなく、遊び仲間や子供組、若者組といった年齢集団のなかで、さまざまな年齢や性格をもった仲間との遊びを通じて、社会生活のルールを学び、一人前の村

人として成長していった」<sup>(22)</sup> といっても、実際にそうした教育やしつけがどれだけの成果を上げていたかは不明であるし、なによりも現在の家庭教育よりも優れたものであったとどこまでいえることができるであろうか。

むしろ、こうした共同体の大人たちは、かつての親・家族と同じように自分たちの生活を守ることに精一杯で、子どもたちを手厚く見守りしつける余裕などなく、子どもたちは放ったらかされていたのではないかと考えられる。たとえば、明治初期に鳥取県の農村で始められた季節保育の例をみると、その村では大人が農作業に手いっぱい学校に通う子どもはまだしも、学齢以下の年齢の子どもはなかば放ったらかしにされており、寛雄平なる篤志の者が危なっかしくてみてはおられずに、そうした子どもたちの託児をおこなうようになった<sup>(23)</sup> という。また、さきにふれた徳岡の庶民家族のしつけについての分析からも、親ばかりでなく地域共同体全体に子どもの教育やしつけを力強く受けとめる余裕などなかった事情を窺い知ることができる。いみじくも、「神かくし、天狗かくし」の迷信が、じつは放任される子どもたちがしばしば行方不明になっていた事実を背景に語られるようになったのではないかと徳岡の言及<sup>(24)</sup> が、かつての地域共同体のなかでの子育ての様子を象徴的に物語っているように思われる。なによりも、近代的な学校教育が成立した背景に、勿論産業化するために従来のような教育では対応できなくなったという事情が深く関わっていた点を見逃すことはできないが、ただそれだけでなく、それまでの家族や地域共同体の手による子どもの教育やしつけに対する不満や不信が横たわっていたのではないだろうか。平塚真樹の、「公立義務教育学校の制度化の過程で、とくに就学への関心が容易に高まらぬ地域に携わっていた人々に共通して意識されたのは、子どもたちを『地域』と『家庭』から、学校に『保護』し、教育することであった。『地域』と『家庭』は、『不潔』『規律のなさ』『不勤勉』など、子どもの形成にふさわしくない、『非教育的な』場と」みなす認識が抱かれていたとの指摘<sup>(25)</sup> が妥当なものだとすると、近代的教育観からすれば、当時の家庭や地域社会が子どもの教育環境としては、甚だお粗末なものであったといわねばならないであろう。

以上のように、家庭教育・しつけが低下したというよりも、子どもを養育・教育するにあたって地域共同体や親族の協力が得にくくなってしまったところに問題の所在があるとの見解も、そもそも地域の協力はそれほど強力なものではなかったのではないかと考えられ、したがって、かつて家族は地域共同体や親族の助けを借りて子どもを順当に教育し、しつけていたというわけにはいかないことになる。さらに、上にとりあげた、公的学校教育を推進する側にとって、地域と家庭が子どもにとって望ましからぬ教育環境として映じていたのではないかという平塚の指摘は、かつて家族や地域共同体は、“それなりに”子どもの教育・しつけに真剣に取り組んでいたのが事実であったとしても、それは近代的教育観からすれば、けっして子どもが適切に教育され、しつけられていたとみなされるものではなかったのではないかという疑問を投げかける。そのこととの関連で広田は、かつての「村のしつけ」がけっして十全なものではなかったことをいくつかの点から明らかにしているが、そのなかで、「われわれが現代の生活の中で『しつけ』という言葉で思い浮かべるような、非労働部分に関する行為の仕方に対しては、庶民家族では注意が払われていなかった……だが、『労働のしつけ』、すなわち家業＝生産に直結した部分では、親は子供にきわめてきびしかった……食事のとき手を洗わなくても別に親はなにも言わなかったが、仕事の後で鍬を洗っておかないとひどく叱られた……ただしこれは、『今の子供はしつけがなっていない』と口にするとき

の『しつけ』とは、まったく意味の違うものであった」との興味深い指摘<sup>(26)</sup>をおこなっている。

かつての「村のしつけ」が十全でなかったかどうかはさておくとしても、食事前の子どもの手洗いには親は無関心であったが、作業後の道具の手入れには厳しかったとの指摘は注目値する。子どもが作業後に鍬を洗っておかないと親からひどく叱られたがそれは今日のしつけとは意味が違うという広田の指摘から、そもそも現在その低下が嘆かれている子どもの教育・しつけは、かつて家族が地域共同体との連携でおこなっていた子どもの教育・しつけとは異質のものなのではないのかということが含意されるのである。そうすると、さきにとりあげた、かつての庶民家族では子どもは7歳頃までは放ったらかしであるが、7歳を過ぎて子どもが役に立つようになると労働に参加させて厳しくしつけたとの徳岡の指摘が特別の意味をもつようになる。すなわち、かつて順当におこなわれていたとみなされているのは“労働力化された子ども”のしつけではなかったのか。さきにとりあげた佐藤カツコが、さらにつづけて、「農業の場合であれば、草刈り、田草とり、稲刈り、麦ふみ、縄ない、草履作りなどの仕事を手伝いながら、生産人として訓練されていった。こうした社会においては、子どもを生産人として一人前にすることが、ほとんどそのまま『しつけ』の内容であった」といみじくも述べている<sup>(27)</sup>ように、それが地域共同体の協力の下におこなわれていたとしても、かつての家庭教育・しつけの主眼は働き手、それもその労働内容が特定化された働き手の育成にあったのである。しかも、それは子どもが実際に労働へ参加するなかで遂行されるものであったのである。要するに、あくまでもその当時の感覚からすればであろうが、子どもが一応労働を担える年齢に達すると、早く一人前の仕事ができるように親や周囲の大人等が子どもの仕事振りに注意を払ったということだったのではあるまいか。

そうだとすれば、まず、現在の家庭教育・しつけをむかしの子どもの教育やしつけと比べて評価しようとする事自体意味をなさないことになる。現代における家庭教育・しつけは、けっして特定化された労働を前提としたものではないし、その動機も特定の労働能力をもつ人間の育成にあるというわけでもない。さきに、「家業の後継者や家族労働者の育成という意味をもたない子どもの養育について」明確な方針もつことが困難なことが現代の子どもの養育上のマイナス要因となっているという庄司洋子の指摘をとりあげたが、そうした現代の子どもの養育・教育上のマイナス要因が指摘されているだけでなく、今の子どもが養育や教育が過去のそれと性格を大きく異にするものだということも含意されていて興味深い。さらに、なによりも現代の家庭教育・しつけにおいて、その対象として想定されているのは労働に携わらない子どもたちなのである。後に述べるように、過去において子どもは現代に比べればかなり早い時期に労働に従事するようになっており、また上に指摘したとおり、かつて十全におこなわれていたされるのはそうした早い時期に労働力化された子どものしつけだったとするならば、原理的には15歳ぐらいまでは労働力化されえない、実際にはもっと高齢にならなければ仕事に就くことのない現代の子どもの教育やしつけと過去の労働力化された子どものしつけとを同列において論じることはできないといわねばならない。したがって、今日において家庭教育・しつけとして自明視されている親や家族の手による子どもの教育やしつけは、むしろ、じつはきわめて近代、表現が不適切であれば、今日の社会に特有のものとして捉え直す必要があるのだということになる。



#### 4. 近代的な家庭教育・しつけの登場と子どもの福祉

以上に見てきたように、現在自明視されている家庭における子どもの教育やしつけは、近代以降の社会に特有な、いってみれば近代的な家庭教育・しつけなのである。すなわち、現在の子どもの教育・しつけは、まだ仕事に就いていない子どもをいかに教育・しつけるかという、すぐれて今日の社会に特有の課題に対応しようとしているものなのである。だが、そうであるにもかかわらず、なぜ“子どものしつけがなっていない”，それも，“むかしはちゃんとしつけていたのに”と現在の家庭教育・しつけの低下が嘆かれるのであろうか。その答えは、そもそも子どもの家庭教育・しつけが今日の社会に特有の課題として、なぜ登場してきたのかを問うことによって得られるかもしれない。なぜならば、これまでにみてきたように、現在の子どもの教育・しつけが過去のそれと異質のものであり、したがって過去においてはみられなかったものであるにもかかわらず、過去を基準に現在の子どもの教育・しつけの達成が評価されようとしているのであるならば、今の家庭教育・しつけの出現自体のなかに、子どもの教育やしつけを過去に比べて不満だとの評価に導くような、なにか特別な理由が隠されているのではないかと考えられるからである。

まず、子どもの教育に強迫的に惹かれる近代家族についての寺崎弘昭の論議をみてみよう。寺崎は、「情緒性の巢として成立した」近代家族は、その機能が「セクシャリテ（性愛）やペアレンティング（親による子の養育）に縮減されて」いる結果、子ども中心主義としての面を強くもつようになっており、この子ども中心主義の特性をもつ近代家族は、子どもの教育に脅迫的に惹かれる教育家族であるとし、そして「近代家族においてなぜ教育問題の比重がきわめて高くなるのか、あるいは教育強迫が加速されねばならなくなったのか」への解答として、ホッブスの力を借りて、近代家族が父権家族であり、そのことが正当化されるために、教育が特別な役割を果たしているのだという見解を示している。すなわち、子どもに対する父の支配権は、子どもの教育と自己保存の保障をおこなう「教育する者こそが支配権をもつ」とすることによって根拠をもつようになるという<sup>(28)</sup>のである。たしかに、近代家族が子どもの教育に強迫的に惹かれる教育家族としての面を強くもつために家庭教育・しつけが過度に強調される傾向にあるということもできよう。だが、父権家族の正当化の必要という、変質しつつある家族の内的条件から発生したとされる家族の教育強迫に着目するだけでは、子どもの教育やしつけをめぐる親や家族に家族外部から常に不満が向けられる事態を十分に説明しきれぬものであろうか。もっと家族による子どもの教育やしつけの成果を監視するような、家族に外在する条件が関与しているのではないだろうか。

そこでつぎに注目したいのが、『人間の生産』の場として、新たに結晶してきた制度が『近代家族』なのだとする、落合恵美子の論議である。落合は、まず、アリエス以来の「子どもの誕生」の過程を、妊娠・出産に焦点を合わせて問い直すことによって、「人間を兵力や労働力という集合的な客体として計画・計算の対象とする考え方が生まれ」、「産業主義の一面としての『人間の生産』あるいは『再生産』という観念」が成立するようになった点を明らかにする。「人間は労働力や兵力として意図的に生産せねばならぬものとなった」というのである。そして、そうした人間の生産という役割を担うべくして登場したのが他ならぬ近代家族だというわけである。したがって、「出産・養育・教育は、このとき初めて家族にとっても社会にとっても意図的な目的となった」<sup>(29)</sup>ということになるのである。教育問題との関連で近代以降における家族の果たしている固有の役割が労

働力の再生産であるという見解は小玉重夫によっても示されている。小玉よれば、「近代家族こそは、近代学校とともに、近代国家の統治メカニズムを構成する場」であり、その固有の位置と役割は「労働力を再生産し、労働を市場に供給する」ところにある<sup>(30)</sup>という。以上の見解によれば、産業化の進展や資本主義の勃興によって労働力の生産が大きな国家的課題となるなかで、家族が果たす人間の生産・再生産、あるいは労働力の生産の機能が改めて焦点化するようになった、その結果、家族は将来の良質な労働力を送り出す重要な社会的装置となったということになる。まさに産めよ、殖やせよ、さらにいえば育てよの時代となり、家族は大きな期待を抱かれるようになったというわけである。

たしかに、落合らの論議は、現在の家庭教育・しつけの強調が社会的要請に基づいたものである点を明らかにしている。けれども、現在の家庭教育・しつけがなにゆえ過去に比べて“なってない”と嘆かれるかをけっして説明しているわけではない。この場合にもやはり、もっとなにか過去に比べて“今のしつけがなってない”といわせるような理由がはずである。そこで、本稿で注目したいのが、現代の家庭教育・しつけにおいて、その教育・しつけの対象とされるのが、まだ労働に従事していない子どもであるという点であり、さらに、そうした子どもが、かつては早い年齢から労働力化されていたが、近代に入って、労働を免除されるようになったという事実なのである。近代に入る前までは、というより近代的な学校教育が本格化する頃になるまでは、子どもはかなり早い年齢で仕事に就いて、重要な労働の担い手となっていたであろう点については多くの指摘がみられる。たとえば、さきにふれた、7歳を過ぎて子どもが役に立つようになると労働に参加させて厳しくつけたとの徳岡の指摘がそうであるし、また、ヨーロッパでも、「農村では子どもは農村経済に必須の労働力であり、歩けるようになるとすぐに畑で害鳥を追い、草取りをするなど父親と働いて」いた<sup>(31)</sup>という。このように、近代以前の社会では、子どもは大人の手伝いが少しでもできるようになると労働への参加が求められるようになっていたのである。ところが、近代以降になると、子どもは労働を免除されるようになっていく。いわゆる子ども期の長期化である。さらに、最近の高等教育機関への進学率の上昇を背景に、その期間はますます長期化する様相を示している。まさに、「二十世紀の後四半期としての現代、日本社会における＜子ども期＞は、前代未聞に長くなった」<sup>(32)</sup>のである。結論をさきに言えば、この子ども期の長期化こそが、厳密に言えば、人間が出生後労働に従事するようになるまでの期間の長期化こそが、家庭教育・しつけの低下が嘆かれる、これも厳密に言えば、子どもの教育やしつけに不満が向けられる最大の理由なのである。以下、この点について述べていくことにする。

そこでまず考えるべきは、さきに指摘した、かつての“労働を通じてのしつけ”には必ずしも子どもに対する教育的な働きかけとしての性格だけでなく、多分に子どもの労働管理の性格が含まれているのではないかという点である。おそらく、かつての子どものしつけ手が最も関心を払ったのは、子どもが大人の思った通り仕事をこなすことができているかどうかであったはずである。それは、なによりも子どもに期待されていたのが、早く一人前の仕事ができるようになって自分の食いぶちを自分の力で確保できるようになることであったためであろう。そうした子どもの労働管理は、当然、そのまま子どもの生活を管理することに連なっていったはずである。なぜならば、子どもの生活の主体は、遊びだけではなく労働することにもおかれていたわけであるから、子どもの労働が管理されるとは、とりもなおさず子どもの生活が管理されることに他ならないからである。たとえ

ば、上野耕三郎と岩本俊郎は、産業革命前のイングランドの農村での、子どもの父親の農業労働への手伝い・参加における父親による「子どもの生殺与奪の権まで握っている家父長支配」の例を指摘している。すなわち、父親にとっても労働力の確保と自分の老後の保証という見返りを期待できるといふ相互依存関係も成り立っているとはいえ、基本的には子どもは父親の農地で働くことによつてのみ、衣食住の保障と将来の土地の相続による自立が可能となっているために、父親の支配を受けざるをえないというのである。さらに、「他の家庭に住み込み奉公人として働きに出された小屋住農や農業労働者の子どもたち」も擬制的父親から同じような支配を受けていた<sup>(33)</sup> という。この例からも、子どもの労働参加は、そのまま子どもの労働や生活の管理につながっていたのではないかという点を窺い知ることができよう。

このように、かつて子どもが早い時期から労働に従事するようになっていた時代は、子どもは労働を通じてその生活が管理され、社会に統合されていたのである。だが、子どもが子どもであるあいだは自分の食いぶちを自分の力で確保しなくて済み、したがって早くから労働に従事することがなくなるようになると、そうした子どもの労働活動に対する関心を払う必要がなくなってしまった。それは、労働を通じた子どもの生活の管理という、子どもを社会に統合する方策がその有効性を失うことを意味する。そうだとすれば、子どもの労働からの開放は、子どもを社会に統合する新たな方策を模索する必要を生み出すことになったといわなくてはならない。ところで、子どもの労働からの開放とは、とりもなおさず、子どもの“近代的”保護が始まったことを意味する。すなわち、近代に入って活発化するようになった児童保護の動きは、なによりも子どもを労働から保護し、開放するといった成果をもたらしたのである。その背景には、産業化の初期における児童労働の一般化や子どもの労働搾取の激化といった子どもをめぐる深刻な問題状況が現出するようになっていた事情が横たわっている。勿論、子どもが労働を免除されるようになったのには、「子どもの発見」に始まる「子ども中心主義」という子ども観の転換や、なによりも産業化の進展を支えるための子どもの学校教育の展開への要請が大きく寄与したことも事実であろう。また、近代教育思想の出現するなか子どもに労働よりも教育をとった観念の成立の果たした役割がどれだけ大きなものであったかも忘れてはならないであろう。子どもは、なによりも彼らへの十分な教育の必要性が認識されるようになって、労働を免除されるようになったといわねばならないかもしれない。それが、これまでの大方の見解であろう。だがしかし、それだけでは、さきにとりあげた湯沢の投げかける疑問、なぜ「……育児がなっていないと親を叱り、教育が足りないと教師を叱り、なっていないと子どもを嘆く主張ばかりが横溢」しているかを説明しきれない。湯沢がなかば冗談めかしているように、「満足の表現を禁じ、常に努力向上を旨とする儒教的な民族的習癖」<sup>(34)</sup> が出ているということなのであるか。あるいは、子どもへの教育の達成目標の水準が常に現実の達成を上回るように設定されるためであろうか。勿論、そうではあるまい。

子どもの教育やしつけが常に不満をもって論じられるのは、近代的な子どもの教育・しつけが内包する性格にその原因があるといわねばならない。すなわち、近代以降にみられるようになった子どもの教育やしつけは、たんに子どもに対する教育的な働きかけであるだけでなく、子どもの生活を管理するという面を強くもったものであり、そのために教育する側に常に子どもの行動責任が問われるようになっているのである。だからこそ、教育が、しつけがなっていないと常に嘆かれるのである。もしそうであるならば、近代的な子どもの教育・しつけのなかに彼らの生活を管理すると

いう側面がなにゆえ入り込んできたのかを問わなくてはならない。そして、その際注目したいのが、現在の子ども教育・しつけが労働を免除された子どものそれだという点なのである。子どもが労働を免除されるようになった、早い時期から労働へ参加する必要がなくなった、そうした事態が現出するようになった背景に子ども教育・しつけに不満が向けられる謎を解く鍵が隠されているはずなのである。ただし、子どもの労働免除は子どもへの教育の重要性が認識され、子どもに労働を免除して教育をとった動きが生じたことを背景としたものだとするだけでは、子ども教育・しつけにおいてなにゆえ生活管理という側面が強調されなければならないかという点が十分に説明できない。なぜ、近代以降改めて子どもの生活管理が大きな課題となったかを説明しなければならないのである。そこで、さきに述べたように、従来の労働を通じた子どもの支配や管理に行き詰まりがみられるようになった点に着目するわけである。ところが、そうした子どもの支配や管理の行き詰まりは、子どもが労働から開放されるようになったからというのではなく、むしろそもそも家族が生産の機能を失い、労働を通じた子どもの管理を成り立たせていた家族労働自体が消滅するようになったため生じたのだとみなすべきであろう。人間の労働が家族労働から資本主義的生産における雇用労働へと大転換を遂げようという変化の波が押し寄せるなか、家族労働はしだいに姿を消すようになり、家族の手による子どもの労働訓練や監督の慣行も廃れ、したがって、労働を通じた子どものしつけ自体が成り立たなくなってしまったのである。そうであるならば、なにもわざわざ子どもの労働からの開放をとりあげる必要はないように思われるかもしれない。

だが、ここで留意すべきは、家族労働が姿を消し、親や家族が労働を通して子どもを厳しくしつけることをしなくなった後、子どもをめぐってどのような事態が出現したかである。子どもが工場に働きに出るようになったのである。工場だけでないにしても、家族外部での児童労働の一般化である。勿論、こうした児童労働の一般化がみられたのは主に労働者階級の子どもたちのあいだではあったが、それが子どもにとってどれほど深刻な状況を呈するようになっていたかは、多くに指摘されている<sup>(35)</sup>とおりである。さらに、それが子どもの教育上も由々しき事態であったことは、たとえば上野と岩本の指摘からも窺い知ることができる。かれらによれば、工場制が始まった初期の頃は家族単位の雇用が浸透しており、そのため「かろうじて親子間の職業技能伝授機能が温存」され、したがって子どもに対する親の統制力も健在であったが、そうした家族単位の雇用が衰退すると、親の統制力は弱体化し、「もはや親は職業技能訓練者ではなく、労働の『苛酷さ』は教育機能という外皮を剥ぎ取られ、むきだしの形で子どもの労働を支配」するようになった<sup>(36)</sup>という。わが国でも同様の事態が現出していたであろうことは、明治維新後いち早く産業革命がはかられて工業化が進み、児童問題が深刻化するなか感化救済事業への着手がみられるようになった事情からも窺われよう。

以上のように、家族労働の消滅は、なによりも子どもの家族外部での労働への参加という結果をもたらしたのであるが、この新たな子どもの労働は、かつて家族労働が有していた教育・しつけ機能を持ち合わせるようなものではけっしてなかった。したがって、家族労働の消滅とともに、子どもの教育やしつけに、いわば空白が発生したことになるのである。ここに子どもを教育・しつけるために労働から保護し、開放する必然が生じるのである。子どもが保護、開放されなければならない労働とは、かつての家族労働ではなく、家族外部の工場などでの教育・しつけ機能をもたない労働であったのである。ただし、そうした子どもの労働からの保護、開放の機運が生じるためには、

児童労働問題が深刻化し、近代的な児童保護事業が成立してくることを待たなければならなかった。こうして子どもは、再び家庭に戻されることになったのである。ところが、家族労働はすでに姿を消し、したがって親や家族はかつてのような労働を通して子どもを厳しくしつける手段を失ってしまっていた。ここにおいて、子どもの生活を管理し社会に統合する新たな手だてが模索されることになるのである。それが近代的な家庭教育・しつけなのである。そこでは、もはや子どもの労働管理は抜け落ち、生活の管理が突出することになり、そのために子どもの行動責任が親や家族に強く問われることになるのである。

さて、近代的な家庭教育・しつけが以上のようなものであるならば、今日の親や家族は、かつて家族労働が一般的であった頃におこなわれていた子どもの行動や生活の管理・監督を、子どもを労働に参加させることなく遂行することが強く求められるようになってきているということができよう。だがしかし、労働を通したしつけという手段をもたない現在の家庭教育・しつけは不安定なものとならざるをえない。もはやその成果が子どもの仕事振りに現われるといったような明確なものではなく、いわば不透明になってしまったからである。その結果、常に“なってない”と嘆かれるのではないだろうか。実際には、“なってない”のではなく、むしろ動機づけの点からすれば現代の親の方がはるかに教育・しつけ熱心だとみなすべきなのであるが、その成果が不透明であるために、“なってない”ように映じるだけなのではないだろうか。そのため、ちょっとした子どもの行動にも、“親はなにをしているのか”と責められる運命にあるのである。もしそうであるならば、親は子どもの行動に過敏にならざるをえない。その結果、子どもから主体性を奪うような事態がしばしば生じるようになってしまう。子どもの一挙手一投足が親の監督・監視の下におかれるようになるのである。それは、子どもの福祉、ウェル・ビーングの実現の点からみて、はたして望ましい事態であるといえるであろうか。親が子どもの教育やしつけに熱心になればなるほど、子どもの自己実現が遠のいていってしまう、それが現在の家庭教育・しつけのもつ基本的な性格なのではないだろうか。

## 注

- (1) 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』講談社新書、1999年
- (2) 湯沢雍彦「家族関係の変貌と子どもの未来」松田惺（編）『新・児童心理学講座 12』金子書房、1991年
- (3) 庄司洋子「現代家族の養育機能」一番ヶ瀬康子・古川孝順（編）『現代家族と社会福祉』有斐閣、1986年
- (4) 青木紀「貧困の世代的再生産」庄司洋子他（編）『貧困・不平等と社会福祉』有斐閣、1997年
- (5) 牧野カツコ「母親・父親の生活と子ども」日本家政学会（編）『変動する家族』建帛社、1999年
- (6) 庄司洋子「家族・児童福祉の視座」庄司洋子他（編）『家族・児童福祉』有斐閣、1998年
- (7) 佐藤カツコ「現代家族の訓育機能」木原健太郎・松原治郎（編）『現代社会の人間形成』東京大学出版会、1976年
- (8) 佐藤カツコ、前掲書

- (9) 牧野カツコ, 前掲書
- (10) 牧野カツコ, 同書
- (11) 森田洋司「子どもの養育と家族福祉」望月嵩・本村汎(編)『現代家族と福祉』培風館, 1986年
- (12) 牧野カツコ「核家族と子ども」麻生誠・木原孝博(編)『子どもはどう育つか』有信堂, 1985年
- (13) 松原治郎『核家族時代』日本放送出版, 1969年
- (14) 広田照幸, 前掲書
- (15) 徳岡秀雄「庶民家族におけるしつけ」森岡清美・山根常男(編)『家と現代家族』培風館, 1976年
- (16) 落合恵美子『21世紀家族へ』有斐閣, 1997年
- (17) 網野武博「家族および社会における育児機能の心理社会的分析」社会保障研究所(編)『現代家族と社会保障』東京大学出版会, 1994年
- (18) 原ひろ子「次世代育成力」原ひろ子・館かおる(編)『母性から次世代育成力へ』新曜社, 1991年
- (19) 原ひろ子, 同書
- (20) 飯島吉晴『子供の, 民俗学』新曜社, 1991年
- (21) 網野武博「子どもが生まれ育つ環境」濱野一郎・網野武博(編)『子どもと家族』中央法規出版, 1995年
- (22) 飯島吉晴, 前掲書
- (23) 日本保育学会(編)『日本幼児保育史第二巻』フレーベル館, 1968年
- (24) 徳岡秀雄, 前掲書
- (25) 平塚眞樹「地域社会と教育の現在」教育科学研究会(編)『現代と人間(現代社会と教育①)』大月書店, 1993年
- (26) 広田照幸, 前掲書
- (27) 佐藤カツコ, 前掲書
- (28) 寺崎弘昭「近代家族と教育」蓮實重彦(編)『家族』東京大学出版会, 1998年
- (29) 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房, 1989年
- (30) 小玉重夫「家族の現在」教育科学研究会(編)『現代と人間(現代社会と教育①)』大月書店, 1993年
- (31) 上野耕三郎・岩本俊郎「労働者階級の子ども」宮沢康人(編)『世界の子どもの歴史6 産業革命期』第一法規出版, 1985年
- (32) 上笙一郎『日本子育て物語』筑摩書房, 1991年
- (33) 上野耕三郎・岩本俊郎, 前掲書
- (34) 湯沢雍彦, 前掲書
- (35) 井垣章二『児童虐待の家族と社会』ミネルヴァ書房, 1998年, および古川孝順『子どもの権利』有斐閣, 1982年
- (36) 上野耕三郎・岩本俊郎, 前掲書

[1999年11月30日 受理]